

人郷夢

ストーリー

Vol.9

このコーナーでは、まちづくりなどの活動に取り組んでいる市民の方やグループにお話を伺い、活動内容や活動にかける思いをシリーズで紹介していきます。

今回紹介するのは、震災直後に田村市へ^{アイ}移った若い夫婦、**稲福和之さん、由梨さん**夫妻です。二人は農産物加工場「福福堂」を立ち上げ、農産物の6次産業化に取り組んでいます。稲福さん夫妻に、活動への思いを伺いました。

田村に移住し、田村に嫁ぐ

和之さんは沖縄生まれの東京育ち。平成15年、サラリーマンを辞め、新聞の募集記事を見て「緑のふるさと協力隊」となり、滝根町（当時）役場で活動しました。活動しているうちに農業に惹かれ、そのまま滝根町に移住、自給を目指して就農しました。

「仲間にも恵まれた」と和

之さんは言います。農業者のグループ「あぶくま農業者大学校」で、農業の師匠、佐藤今朝一さんと出会いました。佐藤さんからは、大気・水・大地を汚さないことを基本に、いいあんべえ精神を大切にしながら農薬や化学肥料を使わない農業を学び実践しました。若連会・消防団・商工会青年

部の活動などにも積極的に参加し、地域との繋がりを築いていったそうです。

妻の由梨さんは東京生まれの東京育ちです。由梨さんは知人の紹介で、和之さんが企画した田植えイベントに参加し、和之さんとお会いしました。イベント後、由梨さんは農作業を手伝うため滝根町に何度も通う



「福福堂」の稲福和之さん・由梨さん夫妻（滝根町神俣）

注1 6次産業化…農林水産業（第1次産業）が生産だけでなくとどまらず、食品加工（第2次産業）や流通・販売（第3次産業）へと業務展開する経営形態の多角化をいう。例として農産物のブランド化、消費者への直接販売、レストランの経営などが挙げられ、最近では農村活性化のキーワードの1つとされている。

注2 緑のふるさと協力隊…特定非営利活動法人 地球緑化センターが平成5年から提供しているプログラム。農山村に興味を持つ都市部の若者などが、地域再生に取り組む地方自治体に1年間派遣され、住民と暮らしながら地域密着型の活動に携わる。農山村にとって懸命に地域に溶け込もうとする若者の姿は刺激となり、隊員の地道な活動が小さくても確かな地域再生のきっかけとなっている。

ち、滝根を気に入る、和之さんと共に暮らすことを決意したのです。

二人は東日本大震災直後の平成23年3月12日、東京都内で結婚式を挙げました。その後1年間、震災の影響もあって、由梨さんは東京を拠点とし、週末は滝根町で過ごしました。その中で、二人は何度も話し合いました。和之さんの農業にける情熱、由梨さんの起業への夢……。そして平成24年3月、由梨さんは本格的に滝根へ移住したのです。由梨さんは現在、学校の管理栄養士の仕事をしながら、週末に農作業を手伝っています。

いいであきらめず、いいから始める

誰もが経験したことのない原発事故の中で、空間放射線量や土壌を調べながら、手探りで農業を続けるうちに、「ここであきらめず、ここから始めたい。やむを得ず農業をあきらめてしまった仲間の分も、今後この地域で農業をやる！」と和之さんは強く決意を固めました。

一方で由梨さんは、復興のためにこの地で起業したいと決意しました。復興に対する国の資金援助を自ら調べて申請するなどして、平成25年1月に加工場を自宅の敷地内に建設。営業許



▲「福福堂」で加工した製品

稲福さん夫妻が就農・起業したことは、地域の大きな希望となっています。うるち米・黒米・小麦などの耕作面積は1ヘクタールを超え、「福福堂」が完成してからは、地域のエゴマやブルーベリーをはじめ、地域の農産物を使った商品づくりに奮闘しています。

商品はあぶくま洞などの観光施設や市内の直売所でも取り扱っており、近所の

「福福堂」が地域の希望に

では何も変えられない。考えや思いを言葉にし、行動することが大切。原発事故で地域の農家や主人が大変



▲「福福堂」の外観

な思いや苦勞をしている。福福堂が風評の払拭などの糸口となれば」との願いを込めて活動しています。

農家からは受託加工も頼まれています。地域の協力者の存在が大きいと二人は感じています。

「豊かな自然、そこから生まれる空気、水、四季折々の風景。寒暖の差があり、水もよく、お米をはじめとした作物がとてもおいしい。人が温かく、それぞれが誇りを持っていると感じています」と、稲福夫妻は地域の希望も話していました。

取材を終えて

移住してよかったのは、自然を身近に感じること、特に星空がきれい、晴れた夜空を見上げると流れ星が見えることに感激していると、稲福さん夫妻は言います。東京から家族や友人を招いたとき、彼らが自然に触れて喜んでる姿を見るのが何よりうれしいそうです。

二人に次の夢は何ですかと尋ねたところ、「原発事故の直後は風評被害が深刻でしたが、放射線量は低いので、地域の農業を活性化させたい。そのために、農業体験を通して都市と交流しながら、数年後には農家民宿を開業したいと考えています。農業の魅力を発信し続けることで、この地域を盛り上げ、新たな移住者のよき相談相手となればうれしいですね」と笑顔で話してくれました。稲福さん夫妻が新たな移住者の「師匠」として活躍されるのも、そう遠い日のことではないのかもしれません。

（協働まちづくり課・農林課）